

徳島県阿南市高原寺城について

福永素久

はじめに

徳島県阿南市桑野町に位置する高原寺（こうげんじ）城は、中世から戦国期にかけて存在した山城である。特に、天正三（一五七五）年の長宗我部元親の阿波侵攻後、その際長宗我部氏側に服属した在地土豪の居城として機能した事は、注目される。この城に関して、本田昇氏が既に研究されているが¹⁾、徳島県では平成十八（二〇〇六）年から五カ年計画で、徳島県中世城館総合分布調査を実施するにあたって、再調査される事となった。本稿では、長宗我部氏による阿波侵入する時期を中心に、城の史的評価を考察していくことにする。

一、高原寺城の様相

(一) 高原寺城について

高原寺城は、徳島県南部の阿南市桑野町に位置し、桑野盆地北端の標高約八〇mの尾根上に位置する中世山城である。近世の編纂地誌『阿波志』によれば、「高原寺壘 在桑野村吉祥寺永祿年中源康明此天正中佐藤伊賀守代之基址高低三等其下為高原寺廃址今置小



図1 阿南市域の中世城館分布図（S = 1/200000）

佐藤氏が入り天正十三（一五八五）年豊臣秀吉の四国平定により、廃城になったものと考えられている。

(二) 縄張り構造について

縄張り図（図二）については、既に本田昇氏が昭和五八（一九八三）年に調査・作成され、『中世城郭事典』に記載されているので²⁾、それを用いて検証すると、城域が尾根先端部分に占地されている事がわかる。城域の中心となる曲輪Iは南北三二m×東西十二mあり、北側がやや高くなっており、南側に近づくにつれて段差が生じてい

菴」とある³⁾。源康明は桑野康明の事で、桑野城主東條関兵衛（せきのひょうえい）の一族と考えられる。東條氏は長宗我部氏の侵攻後、長宗我部氏に服属して、西方城（阿南市）へ移動し、康明が桑野城に入った。そして、高原寺城には桑野氏の親戚筋に当たる、

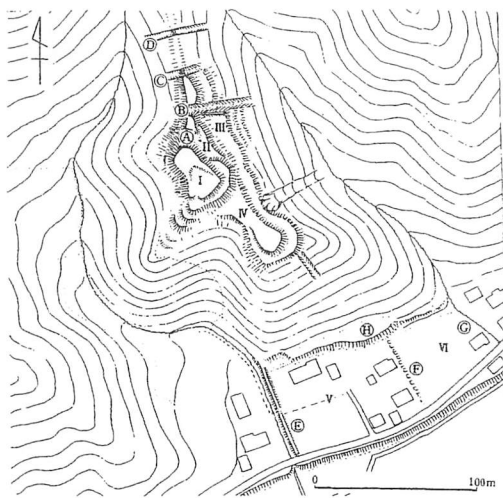


図2 高原寺城縄張り図
(本田 昇氏作図『中世城郭事典』より)

徴とは異なる。堀切④は曲輪Ⅱと繋がっており、一番深い堀切⑤は、東側へ豎堀となつて落ち込んでいる。曲輪Ⅲは緩斜面であるため、土塁が設けられている。また麓部分には、居館部分に相当する、曲輪Ⅴ・Ⅵがあり、Ⅴの西側には、土塁が残存しており「居屋敷」とよばれる地名が残っている。

(三) 表面採集 (表採) された遺物について
平成十八 (二〇〇六) 年十二月二十九日と平成十九 (二〇〇七) 年一月五日に、徳島県中世城館総合調査の一環として、高原寺城の遺構確認調査を、筆者 (福永) と徳島県立博物館と徳島市立徳島城博物館の学芸員の方と行なった。その際、地表面に出ている遺物を表面採集 (表採) する事ができた。

曲輪Ⅴと「居屋敷」には、輸入青磁器と国産陶磁器が表採する事

る。ここから北側の尾根には、三条の堀切がある。徳島県の中世城館は、非常にコンパクトにまとめられている地域的特徴があり、高原寺城のように、堀切が三条あるのは地形の城郭の特

ができた。輸入青磁器では、十三世紀頃の龍安窯 (中国南部) と思われる、緑釉 (りよくゆう) の蓮花碗 (れんかわん) の破片が出てきている。また国産陶磁器では、十六世紀頃の美濃焼がでてきている。一方で、山城部分では、曲輪Ⅳにおいて備前焼の摺鉢や窯元不明の甕の破片などが表採されており、いずれも十五〜十六世紀の遺物である。山城は緊急時のみ利用されるのが、通常で、普段は麓に居館を置いて日常的な生活を送っている。高原寺城の場合、曲輪Ⅰ〜Ⅳまでが山城部分で、曲輪Ⅴ・Ⅵが里城に相当する。その里城部分にも、山城部分に表採できた、同時期の摺鉢が出てきている。そのような日常生活を表すこのような遺物が山城部分に見つかる事は、高原寺城がある程度の規模を持った城郭である事が窺えられる。(図三・図四)



図3 曲輪Ⅲにおいて表面採集された遺物



図4 「居屋敷」で表面採取された遺物 (写真右端が青磁。)

二、長宗我部氏侵攻と高原寺城について

(一) 長宗我部氏による侵攻と在地土豪

元龜二(一五七二)年に、土佐の長宗我部元親の末弟島弥九郎の乗った船が那佐湾(海部郡海陽町)において、海部城主海部左近將監友光により、急襲され弥九郎が殺害された。それを口実に、長宗我部氏による阿波侵攻が開始された。天正三(一五七五)年には、海部城海陽町を落城させ、すでに天正三年中には、海部・那賀二郡の阿波南方を制圧した。

このように、短期間の内に阿波南方制圧できたのは、阿波へ侵入する前から、阿波国守護細川氏や三好氏についていた、阿波国内の在地土豪を謀略してきた事が、最近の研究で明らかになってきている。徳島市立徳島城博物館学芸員の須藤茂樹氏の御指摘によれば、長宗我部方の謀略に乗った、阿波国内の在地土豪が、後に長宗我部氏の家臣に列せられた事が、「長宗我部地検帳」に記載されている事や、最近発見された「日和佐家文書」や「四宮家文書」(共に高知県立文書館所蔵)にも、それに関する書状が出てきている。

このような事実から、東條氏は長宗我部氏に服属し、一族である桑野氏や佐藤氏も服属されたものと考えられる。『元親記』⁶⁾には、つぎのような記述がある。

桑野城主東條閔兵衛領分牛岐城主新階^⑦道善入道及度々取掛、稲ヲ狩り麦ヲ薙キ依狼藉働、元親桑野ノ城へ中内兵庫ヲ大将二加番ヲ差籠ラレタリ、

「阿州南郡今市鍵之事」

とある。つまりは、東條氏の領分である土地に、牛岐城(阿南市)城主新開道善の手勢が入り込み青田刈りを行なっているので、長宗我部氏の家臣である中内兵庫を加番として桑野城へ送り込んだとある。その事からも、東條氏は長宗我部氏方についていた事がわかる。一方で史料中にてくる、新開道善も後に長宗我部氏に降伏しているが、天正十(一五八二)年に丈六寺(徳島市)において、長宗我部氏方に誅殺されている。そして、元親の弟である香宗我部親泰が、海部城から牛岐城に移り、阿波侵攻の南方の拠点とした。

(二) 長宗我部氏侵攻後における高原寺城の位置付け

高原寺城の桑野盆地には、桑野城・畑山城・佐渡守壘が存在する。佐渡守壘については、所在が現在確認中であるが、畑山城に関して『阿波志』では、「在桑野村呼城山天正四年〔長宗我部〕秦 元親置令桑野義明卒兵二百守之」とある。この事から、桑野城・畑山城は少なくとも、桑野地域においては長宗我部氏方の城となっていた事が窺えられる。一方で、東條閔兵衛は桑野城の後に、西方城へ移動している。これは推論ではあるが、一般には、東條氏が率先して西方城を準備したとされているが、その背景には、元親の意図も考えられる。このように考えると、天正三年から少なくとも天正五(一五七七)年の間、長宗我部氏が阿波へ侵攻した当初は、牛岐城を拠点に自身になびいた、阿波国内の在地土豪の居城を「末端」の支城として機能していたのではないだろうか⁷⁾。一方で、桑野城は遺構の破壊が進み、遺構を観測する事が難しい。しかしながら高原寺城と比べる

と、規模が小さい事が推測できる。また高原寺城で表採された遺物や、縄張り構造から考えられると、桑野城よりも、高原寺城の方が支城として、高い位置にランク付けされたと考えられる。

まとめと今後の課題

以上で、簡単ではあるが高原寺城を考察してきたが、当初は桑野城の支城としての位置付けであった。しかしながら、中世城館調査での遺構確認調査での結果や、在地土豪の動向から考えると、そのランク付けが違ってくるようになる。本稿では、高原寺城を主に取り扱ったが、今後は阿南市域も含む、中世城館と在地土豪の土豪を中心に見ていくことで、天正期前半の阿波侵攻初期における、長宗我部氏の動向が解明できるのではないだろうか。その為にも、中世城館調査の進展が求められる。

註

- (1) 『中世城郭事典』第三巻、新人物往来社、一九八七年。本田氏は昭和五八(一九八三)年一月に調査された。
- (2) 『阿波志』(写真帖は徳島県立図書館所蔵)は、文化年間(一八〇四～一八年)に儒学者佐野之によって作成された地誌書。また、高原寺城について他の文献では、『故城記』では「桑野城 河内守(康明)」とあり、桑野康明にあたる。また『城跡記』には、「桑野城、天正年中落城、

主将桑野河内守、後佐藤加賀守」とある。『城跡記』に関して、『阿南市史』では佐藤加賀守は、佐藤伊賀守の誤りとしている。

(3) 註1参照

(4) 阿波国内の中世城郭の特徴として、規模が他の地域と比べて小規模である事が上げられる。例えば、平均的に比高が五十m未満に立地するケースが多い。本田昇氏は、この理由を次のように述べている。

一、戦国時代になっても守護大名細川家が比較的長くその地位を保つていて、阿波国が戦国時代化に入るのが遅れたこと。

二、両細川家の争いから三好長慶の畿内制覇、そして、信長との抗争までの長期間、阿波の武士たちはたびかさなる畿内への出陣のため、畿内でこそ築城を行ったが、阿波国での築城はあまり行わなかった。また長期にわたる畿内への出兵は、阿波の武士たちを経済的にも軍事的にも疲弊させた。そのため長宗我部元親の阿波侵入に対しても有効な築城ができなかった。

三、長宗我部氏は四国制覇のち、領国経営の整備や大規模築城など秀吉軍に対する迎撃体制が整わぬうちに四国征討を受けて敗退したことから「阿波の中世城郭」(下)、『史窓』第十七号、徳島県地方史研究会刊行、一九八七年、四三頁)。と指摘している。

高原寺城の場合、図中掘切⑥が、当初存在した掘切で、あと北側へ続く尾根に展開する、堀切は長宗我部氏の侵攻後、改修を受けたものと考えられる。また、主郭後ろの尾根に掘切を設ける事は、長宗我部氏の築城パターンである事も、本田氏は指摘されている。

(5) 徳島県も含め、近世において在方知行制を行なった地域において「屋

敷」地名は、特別な意味を持つ。例えば、「古屋敷」・「百姓屋敷」は、近世では庄屋や百姓であるものの、中世期にいたっては、在地の土豪であった可能性があるからだ。しかし、今回の「居屋敷」は、今住んでいる屋敷という意味にも捉えられる事もあるので、慎重に取り扱う必要がある。

(6) 徳島県立図書館所蔵

(7) 一方で、長宗我部氏によって破却された城郭も考えられる。「長我部宗地検帳」をはじめ、元親の関連史料には、現在の所破却を窺わず史料が見つからないもの、最後まで長宗我部氏に従わなかった在地土豪もいたわけで、その居城を対象に破却された事は、充分に考えられる。但し、破却するには、理由が必要で、その理由が見つからない現在、破却が行われなかった事が大勢を占めている。